

R2 地域協働研究（ステージI）

R02-I-16 「東日本大震災津波伝承館を拠点としたゲートウェイ機能に関する調査」

課題提案者 東日本大震災津波伝承館
研究代表者 総合政策学部 山本健
研究チーム員 熊谷正則・熊谷和典（岩手県）

<要旨>

岩手県は、三陸の津波災害の歴史や、東日本大震災津波や復興の取組に関わる写真や映像、被災物などを展示し、東日本大震災津波の悲劇をくり返さないため、震災の事実と教訓を後世に伝承するとともに、復興の姿を国内外に発信することを目的に、2019年9月22日に東日本大震災津波伝承館を設置した。加えて、岩手県沿岸部南端の玄関口として、ここを足がかりに県内各地へと足を延ばしていただく「ゲートウェイ」としての役割が期待されていた。いかに来場者の満足度を高め、地域の交流人口の創出、ひいては、沿岸全体の地域活性化につなげていくかを検討する基礎データを収集することを目的に、来場者アンケート調査、事例調査を実施した。

1 研究の概要（背景・目的等）

東日本大震災津波伝承館には、来館者が他地域へも足を運ぶ「ゲートウェイ機能」を強化することを通じて、地域の交流人口の創出、ひいては沿岸全体の地域活性化を促す役割を果たすことに対する期待が寄せられている。これを具現化するためには来館者の動態を把握し、その分析結果に基づいたマーケティング思考の取組が必要不可欠である。しかしながら、伝承館単独では調査から分析、施策立案までの経験に乏しく、専門的見地からの助言の下で実施することが望まれていた。過去に三陸沿岸道路の整備が地域経済にもたらす効果についての調査を実施した経験より、伝承館への来館客に対するアンケート調査を行い、その成果を踏まえた政策提言を行うこととした。

2 研究の内容（方法・経過等）

当初は来場者数がピークを迎える2020年6月から8月にかけて、平日と休日に分けて500名程度の個人来場者、100名程度の団体来場者を対象とするアンケート調査を実施する計画を立てた。回収率の向上とデータの欠損を抑える目的と教育上の効果への期待から、岩手県立大学の学生や県内の高校生を登録し、調査票を来場者に渡して記入してもらうのではなく、調査者がひとつひとつの設問について読み上げ、回答を書き取る対面形式で行うこととした。

専門家でもなければ、調査の経験すらない大学生や高校生に調査を依頼するに当たり、十分なメリットがもたらされるよう、地域が直面する諸課題についての情報提供や調査技法や分析手法の教示を対価として考え、また時間的・心理的負担を考慮して、一人当たりの調査対象者数を20名程度に抑えるなどの配慮を検討した。さらに調査対象者に対する謝礼として、地元産木材を使用したノベルティ・グッズを用意し、気持ちよく調査に協力してもらえよう考えた。

しかしながら、研究期間に入ったころには新型コロナウイルスの感染の状況が深刻さを増し、調査の実施は困難に陥った。4月7日から非常事態宣言が発出され順次全国に拡大され、感染状況の落ち着きを見て完全に解除される5月25日までの間、伝承館自体も閉館を余儀なくされた。再開後は来館者数こそ急

回復を見せたものの、大学生や高校生に調査を依頼しようという計画は撤回せざるを得ず、2020年9月から10月にかけて伝承館のスタッフが、来場者ひとりひとりに声をかけて調査を行うこととなり、最終的に601名からの有回答を得た。

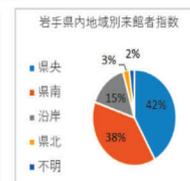
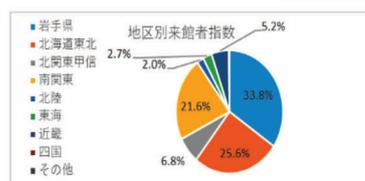
3 これまで得られた研究の成果

アンケート調査の結果

① 居住地

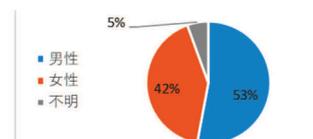
岩手県内が33.8%、岩手県外が66.2%であった。県外を地域別に見ると、北海道・東北地区(25.6%)が最も多く、次いで南関東(21.6%)の順となっている。

区分	岩手県内	岩手県外
人数	203	398
割合	33.8%	66.2%



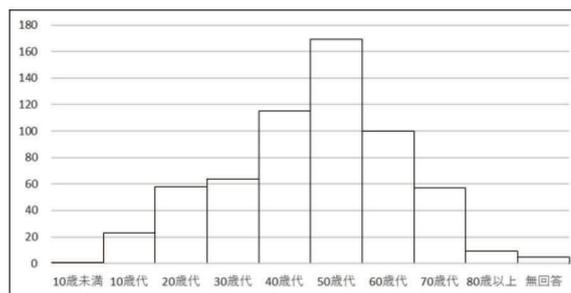
② 性別

性別	人数	割合
男性	318	52.9%
女性	250	41.6%
不明	33	5.5%
	601	100.0%



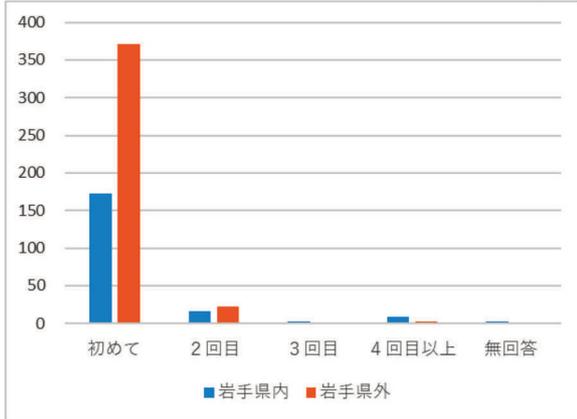
③ 年齢別

50歳代(28.1%)が最も多く、次いで40歳代(19.15%)、60歳代(16.6%)の順となっていた。

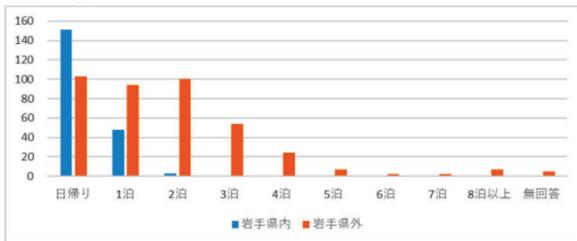


④ これまでの来館回数

県内では15%、県外では7% がリピーターであった。

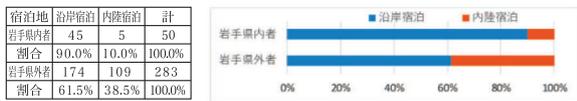


⑤ 宿泊日数



⑥ 宿泊地

県内では9割が沿岸に泊まっていたのに対して、県外では約4割が内陸に泊まってから来館していたことが分かった。



⑦ 伝承館を起点に訪れた / 訪れたい観光施設等

県内は、浄土ヶ浜(宮古市)(14.0%)、碁石海岸(大船渡市)(11.9%)、龍泉洞(岩手町)(10.9%)の順となっているのに対して、県外は浄土ヶ浜(宮古市)(16.9%)、世界遺産平泉(15.7%)、龍泉洞(14.3%)の順となっている。



⑧ 伝承館を起点に訪れた / 訪れたい震災伝承施設

県内は奇跡の一本松(陸前高田市)(41.9%)、もぐらんぴあ(久慈市)(12.0%)、いのちをつなぐ未来館(釜石市)(11.2%)の順となっているのに対して、県外は奇跡の一本松(陸前高田市)(51.0%)、いのちをつなぐ未来館(釜石市)(12.3%)、たろう観光ホテル(宮古市)(11.5%)の順となっている。

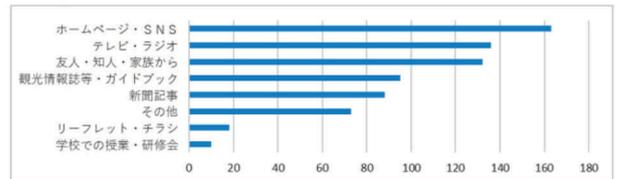


⑨ 来館前後の立ち寄りポイント

伝承館の前に立ち寄ったポイントは、気仙沼市が39人と際立って多く、三陸沿岸道路整備の効果の現れである宮古市・田野畑村の34名が続く。後に立ち寄るポイントは、気仙沼市が59人、陸前高田市が52人、大船渡市が36人となった。また、南三陸、松島、仙台という回答も目立つ。来館者の大まかなイメージとしては、近くに居住している人は伝承館や近隣の施設を最終目的地にして直接往き来しているグループと、遠方から訪れて浄土ヶ浜や龍泉洞、平泉や花巻といった県北部や内陸部から陸前高田を経由して三陸沿岸を南下しているグループに大別できる。

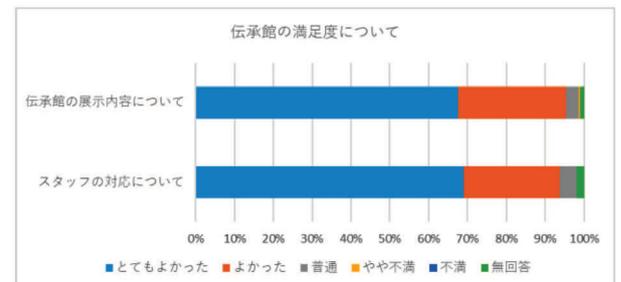
⑩ 情報入手媒体

県内はテレビ・ラジオ(29.9%)、友人・知人・家族から(20.9%)、新聞記事(19.1%)の順となっており、県外からはホームページ・SNS(28.8%)、観光情報誌等ガイドブック(17.2%)、友人・知人・家族から(16.9%)の順となっている。



⑪ 伝承館の満足度

来館目的別に見ると「友人・知人の勧め」による来館者ほど満足度が高いことが分かった。



4 今後の具体的な展開

調査が終わった後にも、気仙沼横断橋の開通によって仙台方面からの飛躍的に向上した点、道の駅や伝承施設といったテーマ別の周遊が浸透してきている点を踏まえ、引き続き定点観測的に調査を継続する。